日付のある対話

江藤 淳

日付のある対話

江藤 淳

北洋社

著者略歴

1933年東京生れ。慶応義塾大学英文科卒業。文芸評論家。東京工業大学教授。「季刊藝術」編集同人。

著書 『夏目漱石』『奴隷の思想を排す』『作家は行動する』『海賊の唄』『作家論』『日附のある文章』『小林秀雄』(新潮社文学賞)『西洋の影』『文芸時評』『アメリカと私』『犬と私』『続文芸時評』『成熟と喪失』『崩壊からの創造』『考えるよろこび』『漱石とその時代Ⅰ・Ⅱ』(菊池寛賞・野間文芸賞)『旅の話・犬の夢』『アメリカ再訪』『一族再会』『批評家の気儘な散歩』『夜の紅茶』『文学と私・戦後と私』『海舟余波』『フロラ・フロラアヌと少年の物語』『決定版夏目漱石』『こもんせんす(正・続・続々・再び・再々)』『漱石とアーサー王傳説』『海は甦えるⅠ・Ⅱ』『明治の群像Ⅰ・Ⅱ』『朝日小事典夏目漱石』『もう一つの戦後史』『なつかしい本の話』『蒼天の谷』他に『江藤淳著作集』(全6巻)『続江藤淳著作集』(全5巻)『江藤淳全対話』(全4巻)がある。

日付のある対話

一九七九年一月二十五日　第一刷発行

定価　九三〇円

著　者　江藤　淳

発行者　伊藤金吾

発行所　北洋社

東京都千代田区富士見二―二―一

電話　(二六四)〇五五一　〒一〇二

振替　東京一―一三三二四三

印刷所　豊国印刷

製本所　大進堂

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© Jun Eto 1978

目

次

I

生きるための条件　吉田　満　5

日本とアメリカ・一九七八　宮沢喜一　28

〝残るもの〟と〝残らぬもの〟　中山伊知郎　43

戦後史の再検討　佐藤誠三郎　77

〝緊張緩和〟か〝天下大乱〟か　神谷不二　97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅱ

勝海舟と広田弘毅　城山三郎　127
立国は私なり、公にあらざるなり　佐藤誠三郎　150
"ごっこ"の時代は終ったか　中島　誠　172
戦後日本の逆説　湯川秀樹　203
あとがき　230

日付のある対話

I

生きるための条件

吉田　満
（作家・日本銀行監事）

江藤　先般ある週刊誌で宮沢喜一さんと対談しました。その時、戦後が終っても敗戦の〝傷痕〟が依然として残っている、というより、戦後が終るにつれてむしろ、〝傷痕〟が残っているという事実がだんだん鮮明になってきたという話になったのです。宮沢さんは現職の閣僚ですから、活字になった時には多少表現を緩和されたように思いますけれども、その時の話を私流に翻訳してみますと、こういうことではないかと思うのです。

今日、一九四五年にアメリカを中心とする連合国が構想した戦後の世界像は、大きく変ってしまった。いちばんわかりやすいのが通貨ではないでしょうか。戦後の国際通貨制度を規定したIMF・世界銀行に象徴されるブレトン・ウッズ体制はすでに絵にかいた餅のようなものになってしまった。もちろん米ソの二極構造も多元化してきている。そして日独という敗戦国が、今日の自由世界の経済を支える大きな柱となり、アメリカとともに三本の柱を構成している。中でも、欧米文明とは異質の文明を持った日本が、三本の柱のうち一本を構成するようになった、という

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

事実は目覚ましいことだともいえる。

しかし一方で、われわれ日本人の心の中をのぞき込むと、円が高くなり、経常収支の黒字が百億ドルを超える、というような話を聞くたびに、〝敗戦の傷痕〟がうずくような気がする。つまり、客観的な戦後の終焉と内面的な敗戦の傷痕のうずきが、奇妙に入り交じって感じられているのが昨今ではないだろうか、という気がするのです。

吉田さんは昨年十一月に『提督伊藤整一の生涯』という本を上梓されましたが、この沖縄特攻作戦の最高責任者であった伊藤整一提督の影などは、むしろ昨今だんだん濃くなりつつあるといえるのではないでしょうか。ご郷里に碑が建つとか、運命の摂理でたまたま戦艦「大和」に乗り合わせておられた吉田さんがそういう本をお書きになるとか……。

他方、吉田さんの本にはスプルーアンスという、伊藤さんと戦った、いかにもアメリカの武人らしいすぐれた提督が描かれています。彼は、英語に oblivion という言葉がありますが、それこそいたのかいないのかわからないようなことになっているようですね。その対照も非常に鮮やかな感じがします。これはアメリカが勝った国だからでしょうね。

吉田　敗戦の傷痕ということは、宮沢さんとの対談では、もう少し具体的にご説明いただくと、どういうことだったのでしょうか。

江藤　これは宮沢さんが言われたのです。「江藤さん、あなたは戦後世界が終ったと言われた。それはそれなりにわかるけれども、にもかかわらず、敗戦の傷痕は深いですね」というふうに言われたのです。そして、私はなぜかその時、ひどく感動したんです。

吉田　それとどうつながるのかよくわかりませんが、あの本のあとがきにも書いておきましたが、少なくともわれわれのように戦争を経験した世代には、戦後日本の出発に、何か重大な欠落があるのではないかということを、おぼろげに感じながら、それが何であるかをなかなか的確につかめないで、ともかく戦後の復興をやってきたという気持が強いですね。

つまり日本という国、日本人という基盤、そういうものを、いわば一応ご破算にして、戦後の復興をやってきた。しかし、いつの日か必ず世界の中で、あくまで日本人として、あるいは日本の国の一員としての、役割が問い直されるときがくるはずだという気がします。

戦後の日本の力が取るに足らなかった時代は、そういう問題はあまり表面化しなかったのですが、いわゆる高度成長期が終るころから、あらゆる面でそういう問題が出てきて、日本人の現状との間に大きなギャップができた。それは私どもから見れば、やはり一つの傷痕だと思うのです。ですから、もう一度あの戦争に立ち返って、日本人にとってああいう戦争をやり、ああいう結末になったということは一体どういうことだったのかを問うことによって、戦中から戦後につながる一貫した存在の基盤のようなものを見直してみたい。そして、それによって少しでも、いま言ったギャップを埋めたいという気持が、あの本を書いた動機です。

江藤　そういう意味で非常に大事なお仕事だと思うのです。しかし、今、吉田さんのおっしゃった、戦争中から今日まで時間はずっと続いているので、ある時、ご破算にして棚上げして、というふうにはいかないんだということを、私が骨身にしみて知らされたのは、二十代の終りにアメリカに留学したときです。

アメリカ人は、勝った国の国民ですから、あらゆることについてそういう連続的な発想で問いかけてくる。われわれのほうで昭和二十年八月十五日以前のことはご破算にして……と思っていても、そういう理屈を全然受け入れてくれない。彼らはある意味では、戦争中と同じような猜疑心に満ちた目で日本人を見ているし、それに対してわれわれが正直に答えないと納得してくれない。

そこで愕然と気がついたのは、軍艦と軍艦、飛行機と飛行機、軍人と軍人の戦争は、とうの昔に終ったかもしれないけれども、国家と国家、エトスとエトスのコンフリクト（争い）は全然終っていないということです。幸か不幸か、私はアメリカに留学していわばエクスポーズ（露出）されることによって、それをイヤというほど味わって帰らなければならなかったわけです。とくにアメリカ人は真面目な国民で、うやむやにしてくれませんから、こちらもそれだけ自分を問い詰めなければならない。

私が帰ってきたのは、東京オリンピックの直前でしたけれども、日本の雰囲気と何か波長が合わなかったですね。そして「火を噴くときも、噴かないときもあるけれども、ともかく異文化間のコンフリクトというものはずっと恒常的に続いているのだ」ということが、いつか、多くの日本人の意識に上ったときに、その違和感が解消されるのかもしれないと思いました。しかし、手前みそかもしれませんが、ここ数年、今、多くの同胞が感じていることと、その時私の感じたことはかなりオーバーラップするのかな、という気がしています。

吉田　たしかに今回の日米間の通貨をはじめとする多くの問題の背後には、何か深い価値観の亀

裂のようなものがありますね。江藤さんがおっしゃったように、アメリカは戦争中から戦後にかけて一貫した連続性を保っていますし、さらに、あの戦争に勝った時にアメリカが考えた自分の役割が、その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争の経験によって修正されてきびしくなっていますから、日本人の現状認識との間に大きなギャップがあります。そういうギャップを何とかして少しでも埋めなければならないと思いますね。

江藤　私は昭和十七年の四月、五月ごろの日本人が、日本という国ができて二千年来、いわば一番世界に通じていたのではないかと思います。例えばマダガスカルの沖で何かがあったということが、明日の日本の安危にかかわるという意識を、一番しっかりもっていた時だと思うのです。指導層はもちろん、一般庶民もよくはわからないにしても、そういうことを何となく感じていたのではないでしょうか。

昨年の七月に、東京大学の永積昭教授と一緒にASEAN五ヵ国の調査に行ったのですが、その時にびっくりしたのは、戦争中の南方留学生だった人たちの反応です。彼らにはASEANの指導層の子弟が多いのですが、何かそのころのことが懐かしくてしようがないと言うんですね。「一緒に火たたきを持って焼夷弾を消しました」というようなことを言うわけですよ。

彼らはみんな戦後、アメリカの大学に行ったりして、それゆえに、いま指導層になっている人たちですが、それにもかかわらず、そうなんですね。戦後の留学生の日本への印象と、この戦争中の、物もなく、非常に条件の悪いときに日本に来た留学生の印象を比べると、圧倒的に戦争中のほうがいいんですね。これはやはりその時期が、日本人が一番グローバルに物事を感じた時だ

ったからではないか、それはやはり第二次大戦というものの大きさがそうさせたのではないかと思うんです。

戦後は、国際主義ということが強調されていますが、そういう感受性は、むしろ急速になくなってしまったのではないでしょうか。やはりそのころの日本人が、神武以来一番なにかを敏感に感じていたのではないでしょうか。

吉田　日本人としての自分の基盤が確立していないところに真の国際主義は成立しないでしょうね。

江藤　そのとおりですね。

吉田　十六年十二月八日のハワイの奇襲攻撃の時に、われわれ戦中派の世代は、むしろ冷静だったと思うのですが、一世代上の、とくに知識階級、指導層の人たちは、世界地図を広げてその上を這い回って、日本がどう占領地を広げていくかを予想することに没入していたというような光景がありましたね。あの時のああいう熱気が何であったかを知りたいと思うのですが……。

江藤　もうお亡くなりになりましたが、異色の中国文学者だった竹内好さんは、日華事変には激しく反対された。しかし、私の記憶に誤りがなければ、昭和十六年十二月八日には、「やったなあ」と思われたというんですね。竹内さんは、いま吉田さんがおっしゃった世代です。その当時はまだ若いほうだったでしょうけれどもね。

しかしちょっと話が飛びますが、戦後生きている人間の〝権利〟ということを非常に言いましたよね。少し前までは「身を鴻毛の軽きに致して君国のために奉ぜよ」と言っていたのだけれど

も、それは間違いで「生きていることがいいのだ」ということになった。

しかし私はアメリカから帰ってくるときに、アメリカの大学の給料から少し貯金ができて、家内と二人でヨーロッパをひと夏ブラブラ歩いて、帰ってくることができました。当時のことですから南回りで帰ってきまして、ウィーンからパンアメリカンのフライトⅡに乗った。

そのうち、ビルマのラングーンに飛行機が立ち寄りまして、一時間半ぐらい給油の時間があった。夏の終りでしたがまだ暑かったですね。しかし、とても静かで、やはり仏教国に来たなという感じがしました。売店のおばさんの物腰も、インド人のさっそうとした物腰とはまた違っていて、ああこれは仏教国のつつましさだな、と思いながら、退屈ですから外を見ていたわけです。

そうすると、これはくたびれていたための特異感覚のせいかもしれないけれども、木立のあいだからなにものかの目がこちらを見ている。それがみんな死んだ日本兵の目だという感じがしたのです。そこで、ああそうか、この辺でいっぱい死んだのだなあ、と厳粛な気持になったのを覚えています。

それから数年後にニュージーランドに行ったときに、珊瑚海の上あたりを飛行機で飛んだ。よく晴れていて、南の紺青の海がよく見えました。その海から次々と水泡が立ち上っていて、それがみんなあの辺で散った日本兵の魂だという感じがしたのです。

そういう英霊たちは、もちろんそれなりに弔われているだろうし、遺族の方も手厚く弔っておられるに違いないんだけれども、そういう英霊たちのことをこの三十何年、私たちは真面目に考えたことがあったのだろうか、という感じがこのごろしてならないんです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com